7月16日（木曜日）「むなしさの淵で」

【新改訳 2017】

伝道者の書　1•1－14

「空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下で、どんなに苦労しても、それが人に何の益になろう。」（2、3節）

　伝道者の書の筆者は、偉大な思想家であり、事業家であり、為政者でした。本当に深く強い「空」の体験をして、その中で人生の最も大切なことの証しをしたのだと思います。「主こそ、私の受ける分です」（哀歌 3•24 参照）と。

　この筆者に比ぶべくもありませんが、筆者も極度の虚無感に悩んだことがあります。実につらい、苦しいものでした。立っていても座っていても、食べていても寝ていても、自分がやっていることに実感がないのです。空虚感、憂うつ、空恐ろしさに覆われるのです。しかし、その体験の中で人間として最も大切なものに出会うことができました。創造主なる神との出会いです。このお方とともに生かされていると知った時、むなしいたましいが満たされたのでした。あなたも「空」に悩んではいないでしょうか。

～祈り～

主よ。人間の「空」を真に満たすのは、あなた以外にはおられません。どうか、そのことに一人でも多くの人が気づいて救われるように、あわれんでください。

【学びのために】

ここで記されている「空」は、単に心理学的に説明される以上の意味があります。すなわち、「たましい」にかかわる霊的な意味を含んでいます。